

## 認知症によっておこる行動の意味と支援 ～支援が変われば生活が変わる～



平成31年はじめの公開研修会は、「認知症によっておこる行動の意味と支援」～支援が変われば生活が変わる～というテーマで、鴻池荘訪問リハビリテーション倉賀野藍子作業療法士を講師に開催させていただきました。

はじめに、WHOで提唱されている「認知症に関する10の事実」より、認知症を取り巻く背景と現状を伝えさせて頂き、認知症は本人や家族だけの課題ではなく全国民として考えなければならない「最優先の公衆衛生の課題」であるとお伝えしました。

次に、認知症は、「時間」「人」「環境や物」など、日常生活において様々な事との関係が障害され、それらが総合的に重なる事で、生活の至るところで小さな「つまずき」をたくさん経験され、不安や混乱をもたらし、妄想や徘徊、興奮などの行動・心理症状が起こるといふメカニズムを説明させて頂き、認知症によって起こる行動の理解を深めて頂きました。また、認知症をもつ人を一人の「人」として尊重し、その人の立場にたって理解しケアを行う「パーソン・センタード・ケア」という考え方についてお伝えしました。

続いて、事例を通して、支援を考える上で重要な視点である①パーソンセンタードケアの考え方をういた「本人に対する支援」と、②認知症に対する家族の理解度、負担や混乱の状況をひも解く「介護者に対する支援」についてお伝えしました。介護者の認知症についての理解が不十分であるために、本人の不安や混乱を助長する状況が起こっていたなど、本人の行動の背景にあることを理解することで、本人、介護者それぞれに対する支援の目的が、見えてくるということをお伝えしました。また、ご本人自身の不安・混乱の問題と、介護者が抱えている問題を整理して考えることや、家族なのか支援者なのか、誰にとっての問題であるのかを明確にすることも大切であること。本人、家族にとって早急な課題でなければ時には「時期を待つ」ことも必要であるということもお伝えしました。

最後に、認知症の問題は、身体面や認知機能の段階、内服の調整などいろいろな要素が関係しているかもしれませんが、「より多くの視点で認知症の方に関わり、家族や地域、他職種がそれぞれの立場で意見を突き合わせる事が大切である」という視点で認知症支援をとらえていることをお伝えしました。

認知症によって起こる行動の意味と背景を整理して理解することで、QOL（生活の質）の向上につながり、支援をより良い方向に変えていけるのではないかと感じた研修会でした。

